

令和元年7月号

◆荒井類 選

《「そろそろ帰ってくれないか」は「あるある」体験》

春は曙そろそろ帰ってくれないか 権未知子

先月号でもご紹介したが、この句は理屈抜きに何だか可笑しい。私は、この句に接して太宰治の小説を思った（題名は失念）。なかなか帰らぬ客に閉口している気持ちを書きつらねた小説だ。そういう客に「そろそろ帰ってくれないか」と思う体験は、多くの人が共有する「あるある」体験である。「あるある」を詠んだ句に人は共感し、滑稽を感じるものだ。

《さすが坪内稔典は学者さんだわ》

ネットをながめていたら、掲句について坪内稔典さんの次の記述に出合った。

この「春は曙」の時間は清少納言の時代の文脈において、「夜明け」としての恋人との別れの時間であり、それをあっさりくつがえしているのがこの句のおもしろさ。

なるほど、いかにも学者さんらしい見解である。

《パンピーの観賞》

古典の教養が高校の授業で習った程度（しかも、大方忘れていた）のちとらとしては、坪内稔典の読解に「なるほど！」と思いつつも、「でも、掲句から、学者ならぬパンピー（一般ピープル）は、そこまでの観賞はできない」とも思う。

パンピーたる私の観賞としては「春は曙」の措辞に枕草子の「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」の景が浮かんで、それが中七下五の裏切りのフレーズ（「あるある」を述べた言葉）に続く意外性に滑稽味を感じる、というところだ。

《「古池や～」のもじりの面白さ、禅味、軽み》

古池や蛙 <sup>とび</sup> 飛込む水のをと 松尾芭蕉  
古池や芭蕉飛込む水のをと 仙厓和尚

二句目は、知らぬ人もなき芭蕉の掲句を「もじったもの（本歌取）」だ。仙厓和尚の句は無季の句だが、金子兜太はこれを「もじりの面白さが素直に受け取れ」「カラッとした禅味」があると評価している。「禅味」とは、「禅の味わい。世俗を離れた枯淡な風趣。」（広辞苑 第七版）。

仙厓和尚（<sup>せんがい ぎぼん</sup> 一七五〇年～一八三七年）は、江戸時代後期の臨済宗の禅僧で画家。芭蕉の俳句から「軽み」を学んだ和尚にはこんな句もある。  
池あらば芭蕉に飛んで聞かせたい 仙厓和尚

「軽み」は、芭蕉が晩年に到達した俳諧の理念。日常卑近な題材の中に新しい美を発見し、それを真率・平淡にさらりと表現する姿。かろみ。（デジタル大辞泉）。

芭蕉の弟子の森川 <sup>きよ りく</sup> 許六は、『俳諧問答』において、「言葉にも筆にもものべがたき所に、忽もいはれぬ <sup>おもしどころ</sup> 面白所あるを、かるしとはいふ <sup>なり</sup> 也」と言っている。

《仙厓和尚より、もっと現代的で、痛快な句》

古池や蛙とびこみ複雑骨折 蔵元秀樹

高校一年生の作者の掲句を、金子兜太は「仙厓和尚よりもっと現代的で痛快な句」と紹介した。〈句の良し悪しより、まず、この柔軟さをみてください。「複雑骨折」という言葉（中略）をさっさと句に取り込む自由さが羨ましいのです。（中略）なんともいえない実感があって、思わず笑い出してしまいます。〉（金子兜太）

### 《道ならぬ恋?》

麦笛や四十の恋の合図吹く

高浜虚子

四十路の男が麦笛を吹く。それが「恋の合図」だということだから、道ならぬ恋（不倫）なのだろう。

当事者は真剣だろうが、はたから見れば笑える景だ。虚子さんの実体験? どうも嘘くさい感じがする。写生の一句というよりフィクションか。虚実皮膜の間の滑稽。

### 《藪蚊を兇状旅の旅人と見立て》

兇状旅で藪蚊は縞の股引よ

島 将五

「<sup>きょうじょう</sup>兇状旅」とは、兇状持（凶悪な罪をおかして追われている者）が役人の追求を逃れて各地を転々とする事。庶民のヒーロー、国定忠治とか座頭市とかの兇状旅は、芝居や映画でおなじみだろう。俠客など、旅から旅に渡り歩く者のいでたちは、

合羽からげて三度笠、<sup>てっこう きゃはん</sup>手甲脚絆に<sup>わらじ</sup>草鞋履き。着物の裾を腰部の帯にからげて着用し、下半身は股引をはいた。

### 《藪蚊はマラリア媒介の凶状持》

藪蚊を兇状旅の旅人と見立てたのは極めてユニークで、蚊の縞模様を「縞の股引」とするところなどすこぶる滑稽だ。藪蚊はたしかに兇状持である。私がボランティアで行ったネパールの農村では、殺虫剤で藪蚊を徹底駆除する以前は、畑のそばに住居はなく、人々は蚊のいない高地から耕地へと通っていたのを思い出した。